

## 徐霞客遊記の基礎的研究 (七)

— 事類篇・洞 (その5)、全行程 (その6)、  
埼玉大学図書館蔵「徐霞客」関連文献目録稿 (2) —

薄 井 俊 二 埼玉大学教育学部言語文化講座国語分野

キーワード：徐霞客、徐弘祖、洞、雲南、文献目録

### 1. はじめに

本稿は、明末の地理家である徐霞客の「遊記」について、基礎的な検討を加えるもので、次の三部構成からなる。第1部は、「事類篇・洞 (その5)」として、「洞穴」に関する遊記の記述を、「滇遊日記」三～五について検討する。第2部は、「全行程 (その6)」として、「滇遊日記」三～五の行程について詳述する。第3部は、「埼玉大学図書館蔵『徐霞客』関連文献目録稿 (2)」として、埼玉大学図書館が所蔵する「徐霞客」に関連する文献について、その目録を記す。

### 2. 第1部 徐霞客遊記の洞穴記述 (その5) : 「滇遊日記 (三) (四) (五)」

#### 2-1. 滇遊日記三

遊記の巻五下は、「滇遊日記三」。雲南における崇禎11年 (1638) 9月1日から、同29日までの記録である。

##### 2-1-1. 洞穴の記述

\* 桃源村手前一峯の「洞門高懸」曲靖府羅平州：9月6日

・門に横木がわたされているのが見えるが、上る手立てがなく、見送る。数えない。

\* 桃源村前の塢 同前：同日

・集まった水が「入崖洞」ののち、南に洩れて「蛇場河」に注ぐのが見える。数えない。

##### 2-1-2. 滇遊日記三のまとめ

滇遊日記三の洞穴記述はゼロ箇所と数える。

#### 2-2. 滇遊日記四

遊記巻六上は「滇遊日記四」。崇禎11年 (1638) 10月1日から11月11日までの記録である。

##### 2-2-1. 洞穴の記述

① 石城の洞 雲南府昆陽州三泊県：10月25日

・石城はおすすめの景勝地。石城の門から入ると、洞が口をあける。入洞。「透空而入、復出於圉崖之内」。門から入るよりは、洞穴から入る方が「更奇」。

- ・崖に鼻腔のような小穴がふたつあり、蜂が巣を作っていた。「1」と数える。

## ②虚明洞及びその隣の洞 雲南府安寧州禄豊県：10月26日

### ○北洞とも言う。

- ・「醒石」の南崖につきだした石があり、その下に、西向きに口を開ける。「大洞」。
- ・「頗大而中拓」、「嵌空透漏之妙」は無いが「虚明」の名にふさわしい。
- ・様々な碑文が刻される。「洞壑玲瓏、眞考槃之勝地」。
- 「大洞」の左の崖がつきるところにまた一洞。
- ・夷狄が草履を編む。中から煙が出ており、炊飯の煙だった。ふたつで「2」と数える。

## ③雲濤洞 同上：10月26日・27日

- ・虚明洞の南、沈家荘の先。上に層楼があり、軒下に洞。いずれも西向き。
- ・楼には仏像がならぶ。香炉や机が樹根で作られ「奇古」。しかし、放置されて久しい様子。
- ・入洞。底に至ると、光が差し込んでいた。ドキドキしながら探索。
- ・26日入洞、27日観察。「1」と数える。

## \*青龍洞と九曲竜宮 同上：10月26日

- ・河の向こう岸に、西向きに口をあける二洞を観察。
- ・向こう岸にあるので行けない。「深為悵悵」だが、雲濤洞と虚明洞を極めたのでよしとする。
- ・数えない。

## \*棋盤山の洞 雲南府昆明県：10月29日

- ・碁盤状の碁盤石があり、そこに僧侶が「仙洞」と呼ぶ、穴がある。井戸のように深く、かつて羊飼いが羊を落としてしまったことがあり、石で入口がふさがれている。ドリーネか。僧侶によれば、この山のあちこちに「崆峒」があるという。探訪したわけではないので数えない。

## ④海源寺周辺の洞 同上：11月8日

### ○上洞

- ・筇竹寺を出て、海原寺へ向かう途中。
- ・洞門は東向き。内は深さ六七丈。頂はふたをなし、底は砥石状。
- ・後壁から水が滴っているが、底にたまってはいない。
- ・野鴿が営巣しており、土人は罌を仕掛けている。やや詳しい描写。

### ○中洞

- ・上洞から北に半里。洞門は東向き。洞門の深さ幅高さは、上洞の三分の一。
- ・枝分かれていないが、門の左に一柱があり、二つの穴があいている。
- ・ふたつで「2」と数える。

## ⑤昆明県沙朗天生橋付近 同上：11月9日

- 「虎狼や妖祟があるので、洞穴を避けなさい」という村人の戒めを無視して探訪。
- ・中通の大洞。石壁の上。顧僕を残し、一人よじ登り「従其側、倒懸入大洞門」。

- ・洞門は南向き。深さ十余丈、広さはその半分。

#### ○前の洞の西の洞

- ・水洞。荷物を人夫にまかせ、顧僕と入洞。洞門は東向き。高さ十余丈、広さはその半分。
- ・「與雲氣同為吞吐」。洞内も水や雲気がある。やや詳しい描写。

#### ○前の洞の更に西の洞

- ・顧僕も残し、ひとり溪流を探索。峽底を東へ遡上。南に折れると「後洞」。
- ・水洞。西向き。高さ広さは前のものと同じ。
- ・やや詳しい描写。

#### ○前の洞の崖の上の洞

- ・なんとか登り入洞。
- ・外門は高くそびえ、内に入るとくぼみや台状のでこぼこ。
- ・「波濤破峽、如玉龍負舟」。「坐久之、聽洞底波声……令我神移志易」。
- ・すべてで「4」と数える。

### ⑥河上洞 富民県：11月10日

- ・沙朗の人が「富民の老虎洞は必見」と。
- ・富民県治から南へ七里。
- ・老僧が住まいとしていたので「老和尚洞」と呼ばれていたのを「老虎洞」と誤ったらしい。
- ・洞に至ると「河上洞」の揮毫が。前任の県知事が、河沿いにあることと「河上公」とをかけて命名したのだろうと推測。
- ・洞門は東向き。洞左の概要と洞右の概要に分けて記述。やや詳細。
- ・「余雖未窮其奥、已覺幽奇莫過」。
- ・「次第滇中諸洞、当與清華・清溪二洞、相為伯仲」と高評価。

#### ○南洞

- ・河上洞かと誤る。南向き。
- ・あわせて「2」と数える。

### 2-2-2. 滇遊日記四のまとめ

黔遊日記二の洞穴は、12箇所と数える。滇池の西北部の安寧州や昆明県に多く見られる。滇遊日記にしては、詳しい描写が見られるものも多い。住居などに利用されていることの報告もある。富民県の「河上洞」は、雲南の洞穴で三本の指に入ると高評価。

### 2-3. 滇遊日記五

「遊記」巻六下は「滇遊日記五」。崇禎11年（1638）12月1日から30日までの記録である。

#### 2-3-1. 洞穴の記述

\*孫家湾付近の洞 姚安府姚州：12月15日

- ・坡の下に「甚束」な洞があるとの記述。
- ・数えない。

\*清華洞 大理府雲南県：12月19日

- ・入洞したと記すが、具体的な記述なし。崇禎12年8月20日に再訪して、詳述。
- ・ここでは数えない。

## 2-3-2. 滇遊日記五のまとめ

滇遊日記五の洞穴は、ゼロ箇所と数える。

## 3. 第2部 徐霞客遊記全行程（その5）：滇遊日記三～五

### 凡例

- ・「1.行程」で、徐霞客がたどった行程を、遊記をもとに日を追って同定する。
- ・全ての資料で同名の場合は、下線を引く。
- ・一部の資料で同名の場合は、( ) で資料の略号を記す。
- ・遊記の表記とは異なるが、当該地であろうと推測される地名は〔 〕で示し、資料の略号を記す。
- ・不詳の場合は〔不詳〕と記す。
- ・「墟」「鎮」などの行政単位の異同は、同一と見なす。
- ・「2.経由地」で、徐霞客が経由した府県を確認する。明代の府県名で示し、( ) で現代(2014年)の地方行政組織名を記す。重複の場合は〈 〉で示し、現代の組織名は略した。
- ・「3.探訪先」で、山岳などの主な探訪対象を記す。( ) で別称や別表記を示す。
- ・「4.まとまった地理記述」で、ある地域についてまとまった地理記述をしているところを記す。

○「滇遊日記」で参照した地図・書籍とその略称は次の通り。

東亜五十万分之一地図 (T)<sup>(1)</sup>

朱恵栄主編『中華人民共和国地名詞典 雲南省』商務印書館、1994 (詞典)

周峻松等主編『雲南省地図冊』中国地図出版社、2006 (①)

星球地図出版社編著『雲南省地図集』星球地図出版社、2017 (②)

黄坤『新譯徐霞客遊記』三民出版社、2002 (新訳)

### 3-1. 滇遊日記三

#### 3-1-1. 行程

9月

1日 雲南省曲靖府亦佐県碧峒〔①「上筆冲」、新譯「筆冲」〕(～3日)。主「雨で黄泥河が増水し、渡河できない」と。

2日 村が騒然。白昼、豺狼が出て羊を襲ったという。自分らは夜旅をしていたが僥倖だった。

3日 ようやく出発、西へ。行き来をしながら、黄泥河畔の集落(黄泥河鎮〔T詞典①②〕)に泊。

4日 西へ。濃霧の中を進む。飯後、竹園箐〔②「箐口」〕を経て、羊場堡〔①②「小羊場」〕に泊。

5日 雨の中を西へ。水槽、水井(①②)を経て、亦佐県城で飯。西へ。北から流れる拐沢河を渡る。羅平州域に入る。暮れて雨の中、集落を得て泊(後に「鶏場東村」と知れる)。

6日 西へ。鶏場〔新譯「小鶏場」〕に至る。ここは鶏場西村であった。桃源村(①②新譯)を経て、清水溝(①)が繞る村を過ぎ、小板村を経て、南寧県域に入る。廻窩坡を経て、馬場〔T「馬廠」、新譯「大小馬場」〕に泊。

7日 西へ。独木橋〔詞典「独木水庫」、①②「独木」〕を渡り、箐口(①②新譯)を過ぎる。追

いはぎが横行と聞き急ぐ。橋頭〔T新譯〕を経て石堡村に泊。ここは以前通ったことがある。

8日 温泉に入り、北上。南城〔T、詞典①②「三宝鎮」〕を経て、曲靖府城に入る。東山寺を探訪。北へ出て、白石河を渡り、新橋(T)を経て、霑益州域に入り、交州廢城(霑益県治)〔詞典①②「西平鎮」〕に泊。龔起潜の家に投宿。滞在(～12日)。

9日 楼にこもり「作数日遊紀」。

10日 寒い。午後から雨。

11日 当初、ここから北上して北盤江の源を探索しようと考えていたが、龔起潜が詳しく教えてくれたので、引き返して尋甸へ向かうことにする。(旧本では、「滇遊日記三」に続いて「盤江考」の文を収録している。)

12日 出発。南下して、新橋から西へ転じる。戈家冲〔新譯「戈家屯」、②「高家屯」〕を経て、劉家坡へ。翠峯山を遠望。翠峯山について記述。翠峯山下の横山屯〔①②「王三屯」〕を経て、翠峯山に登り、朝陽庵に泊。翠峯山滞在(～22日)。

13日 別の僧侶にもてなされる。

14日 翠峯山の地理や霑益州事情などを記述。翠峯山探訪。

15日～21日 山中遊行と寺院滞在。

22日 天候不良で足止めを食らっていたが、ようやく出発、下山。高坡村〔①「下高坡」、②「上高坡」〕、兔街子(T新譯)、堰口(新譯)、洒家〔新譯「色甲」〕、新屯(①②)を経て、保官児莊〔①新譯「保谷莊」〕に泊。

23日 西に。三車(新譯)、一碗冲〔新譯「玉碗冲」〕、魯石哨〔T①②新譯「魯石」〕を経て、尋甸府域に入る。郭擴〔①新譯「戈夸」〕、小溪橋、壁假〔①②新譯「必寨」〕を経て、南に堯林山を遠望。海桐、果壁、柳塘〔詞典・①②新譯「勒唐」〕を経て、北盤江の上流にあたる七星橋(T)を渡る。鳳梧所(土人「馬石窩」)を経て、尋甸府城に泊。滞在(～25日)。尋甸の地形地勢を記述。

24日 出発する予定だったが、地域の図志を入手できそうなので、買うことに。

25日 図志は新しいものではなかったので、買うのをやめ、手付け金も回収。出発。黒土坡哨(新譯)、潘所・金所・魏所〔T・詞典「金所」、①「金所・潘所」、新譯〕、花箐哨〔新譯「花心哨」〕を経て、羊街子に泊。

26日 雨を冒して西南へ。間易屯を経て、果馬村(新譯)へ。ここが雲南府嵩州県との境。小一半村〔詞典・新譯「小倚伴」、①②「倚伴」〕、大一半村〔新譯「大倚伴」〕を経て、嵩明州城に入り、泊。滞在(～28日)。

27日 役人に手紙を書く。

28日 顧僕を宿に残し、城内を探訪。役人からの回答がなかったので、出発。途中で、役人の使いが追いつく。顧僕をやって手紙を取りに行かせる。自らは、法界寺へ向かい、靈雲山を探訪。白馬廟に泊。

29日 梁王山を記述。西南へ。大大村〔新譯「達達村」〕、甸頭村〔詞典①②「滇源鎮」(旧「邵甸」)、新譯〕、甸尾村(①②新譯)を経て、昆明県域に入る。小河口〔①②「松花」、新譯「小河」〕を経て、三家村(①②)に泊。

### 3-1-2. 經由地

雲南省曲靖府亦佐県(雲南省曲靖地級市富源県)

同 羅平州( 同 羅平県)

同	南寧県（	同	轄区）
同	霑益州（	同	霑益県）
同	馬龍州（	同	馬龍県）
同	尋甸府	（同	昆明地級市尋甸回族彝族自治县）
同	雲南府嵩明州（	同	嵩明県）
同	昆明県（	同	轄区）

### 3-1-3. 探訪先

曲靖府治：東山寺（9月8日）

霑益州：翠峯山（9月12日～22日）

嵩明付近：靈雲山、法界寺、白馬廟（9月28日）

### 3-1-4. まとまった地理記述

碧峒周辺：貴州諸処との山脈、民族と町、米価（9月2日条）

黄泥河：川筋、黄泥河集落（9月3日条）

拐沢河：川筋（9月5日条）

越州衛とその周辺：南の大亀山あたりの地勢、北東の閭木山の地勢（9月7日条）

翠峯山：山と水系（9月12日条）

鳳梧山と阿交合溪：山勢いと水系（北盤江の上流）（9月23日条）

尋甸：土府時代と周囲との交通（9月23日条）

隱毒山：尋甸の北西の山、山脈（9月25日条）

果馬山：嵩明の北東の山（9月25日条）

嵩明州：歴史と地勢（9月28日条）

梁王山：嵩明州西北の山系（9月29日条）

## 3-2. 滇遊日記四

### 3-2-1. 行程

10月

1日 雲南州昆明県三家村を出て、西へ。報恩寺（新譯）を経て、松花覇橋〔詞典「小河村」、①「松華街道（小河村）」、②「松華」、（新譯）〕で盤龍江を渡る。五龍山沿いを南下して、省城に入る。雲南省城外の呉方生宅を訪ねる（二度目）（～4日）。

2日～3日 呉方生ら文人と交わる。

4日 晋寧へ。羊市〔新譯「羊市口」今名「南通街」〕を経て、南壩（新譯）から船に乗り、滇池を渡る。西南の風が強く、海夾口に泊。

5日 三鼓（午前零時ごろ）出発し、湖東の北圩口〔詞典・新譯「白魚口」、②「白魚」〕に至る。さらに東南へ、晋寧州歸化県域の安江村〔詞典、①②「安東」〕で上陸。四通橋を渡り、晋寧州域に入る。晋寧州城に入り、泊（～24日）。

6日～7日 張調治・唐大来ら文人と交わる。

晋寧州城〔詞典、①②「晋城鎮」〕に泊（～24日）。

8日 州城北の陽城堡（徐「古土城」）〔新譯「晋寧廢県」〕を訪ねる。



9日～10日 風邪をひく。

11日 州の役所を訪ねる。

12日 役所を訪ね、文人と交わる。

13日 州城西北の金沙山・金沙寺〔詞典②「金砂村」〕を探訪。晋寧の山川を概述。

14日～23日 役所に出入りし、文人と交わる。

23日 晋寧の地誌を詳述。地理・文人・歴史など。

23日 晋寧の概要説明。唐大来との交友。

24日 荷物を唐大来にゆだね、鶏足山へ託送。輕装で晋寧州城を出発。四通橋(13日初出)(新譯)を渡り、石將軍(詞典①)、石魚廟、石魚山を経て、湖中に牛恋石(新譯)〔詞典①②「牛恋」〕を見る。三尖塘(新譯)〔①②「三多」〕、三尖村を経て、**昆陽州**域に入る。赤峒裏〔新譯「渠東里」、①②「渠東」〕、昆陽新城〔詞典・新譯「大新城村」〕、昆陽旧城〔詞典②「昆陽鎮」、①「昆陽街道」、新譯「昆陽旧城」〕を経て、北へ進路を変える。旧寨村を経て、螳螂川の手前を西へ遡上。海口街(徐「茶埠墩」)〔詞典・新譯「老街」〕に泊。「石城の勝」を教えられる。

25日 螳螂川を遡上、対岸に海門村〔詞典「海口鎮」、①「海口街道(海門村)」、②「海口鎮(海門村)」、(新譯)〕・龍王堂(詞典)を見る。渡船で龍王堂に渡り、探索。北岸に渡り、里仁村〔(①②)、新譯「里仁大村と小村」〕を経て、石城(詞典)を探訪。下山し、里仁村を経て、東南の山地を探訪。螳螂川を渡って海口街へ戻る。堤防を遡上。柴廠を経て、平定哨に泊。

26日 西山に沿って北へ。大營莊〔(①)、新譯「大鷹莊」〕、石龍壩(新譯)、青魚塘村を経て、武趣河へ。ここから**安寧州**域に入る。沙河橋で沙河を渡り、螳螂川を渡れば、**安寧州**城。温泉を探しに行く。城内に「靈泉」の額があったが、塩泉だった。北門から出て、雨の中を北へ。温泉(詞典①②)周辺に散見する洞穴などを探訪。曹溪寺(詞典①②)に泊。

27日 曹溪寺を探訪。下山し、**安寧州**城を経て、東に進み、東安哨嶺(新譯)を越え、站摩村、始甸鋪、龍馬山を経て、高梔橋村〔新譯「高梔槽」〕に泊。

28日 東へ行き**昆明**県域に入る。碧鷄関(T、詞典「碧鷄関原名高嶢」、①「碧鷄街道(高嶢)」、②「碧鷄鎮」)、赤家鼻、進耳寺、三家村(②)を経て、棋盤寺に泊。

29日 棋盤山(詞典①②)探訪。東へ。宝珠寺、石鼻山、夏家窰〔新譯「夏窰」〕を経て、**昆明**省城に入る(～11月7日)。

11月

1日～6日 **昆明**省城にて、文人たちと交流。

7日 **昆明**を出発し、富民へ。黄土坡(詞典②新譯)を経て、筇竹寺(詞典②新譯)に泊し探訪。

8日 筇竹寺周辺を探訪。北へ海原寺〔詞典・新譯、①②「海原」〕へ行き、周辺の洞を探訪。さらに北上し、妙高寺(新譯)、牛圈哨、陡坡(①②)、清水塘を経て、沙朗〔(詞典②新譯)、①「西翥街道」〕に泊。

9日 **昆明**県北部の地理を詳述。天生橋洞(詞典)を探索。頭村(新譯)、二村(①②新譯)、三村(①新譯)を経て、羅鬼嶺で**富民**県域に入る。阿夷冲を経て、大哨〔詞典「大營、明の大哨」、①「大營」〕の西に泊。

10日 橋頭、**富民**県治を経て、河上洞探訪。北上し、石関哨(新譯)を経て、大山白泥塘の東麓を北上。二十里鋪、没官莊、者坊関〔T「者白街」、詞典①②新譯「者北」〕を経て、武定府和曲州域に入る。小甸堡〔(①②)新譯「小甸上下村」〕に泊。

11日 **武定**府城に入り、泊。

(以後、11月末まで、日記なし)

### 3-2-2. 經由地

雲南省雲南府昆明県 (雲南省昆明地級市轄区)  
同 晋寧州歸化県 (同 晋寧県)  
同 昆陽州 (同 轄区)  
同 安寧州 (同 安寧市)  
[同 昆明県]  
同 富民県 (同 富民県)  
同 武定府和曲州 (同 楚雄彝族自治州武定県)

### 3-2-3. 探訪先

晋寧州周辺：陽城堡 (10月8日)、金沙山・金沙寺 (10月13日)  
滇池西岸：龍王堂 (10月25日)、石城 (同)  
安寧州周辺：温泉、虚明洞：雲濤洞 (10月26日)、曹溪寺 (10月27日)  
昆明県西部：進耳寺 (10月28日)、筇竹寺 (11月7日～8日)  
富民県の河上洞 (11月10日)

### 3-2-4. まとまった地理記述

晋寧：山川の概略 (10月13日条)、地理・文人・歴史などを詳述 (10月23日条)  
昆明県北部：地理概述 (11月9日条)

## 3-3. 滇遊日記五

### 3-3-1. 行程

12月

1日 武定府和曲州元謀県城官荘 (新譯) の茶房に滞在 (～5日)。顧僕が病氣。  
5日 元謀県の地理を詳述。  
6日 諸僧とともに官荘の茶房を出発。西へ。枯澗〔新譯「白沙乾河」〕を渡り、姚安府大姚県域に入り、瀘頭に泊。  
7日 西へ。瀘頭大村〔①②新譯「新華」「瀘頭壩」〕、乱石岡、大舌甸村〔T「舌甸」、新譯「設甸」〕、独木橋を経て、独木橋村〔詞典「溪木小村、鼠街坡子にあり」、②「鼠街」〕に泊。  
8日 顧僕がまた発病、すぐの水井屯寺に泊。  
9日 西へ。□家荘、倉屯橋、泗峡口、王家橋、孚衆橋、廟山營、廟前打哨、小乞老村、新壩屯、新壩橋を経て、大姚県域に入り、旅館に泊。  
10日 西南へ。南門橋〔自注「志曰承恩」〕、土橋、定遠屯、頼山哨、赤草峯北村、乞老村〔新譯「乞老は少数民族名」〕、鹿家村〔新譯「鹿家屯」〕を経て、東に山を登り、妙峯山徳雲寺に泊 (～12日)。  
11日 徳雲寺に滞在。  
12日 西へ下山。梁橋を渡り、乞老村の端を通り、姚州県域に入る。破寺屯、海口村、息夷村海子、高土官家〔新譯「在姚安光禄鎮」〕を経て活仏寺に泊。  
13日 下山し、土官家の後ろを通り、格香橋、龍岡衛を経て、姚安府城に入り、泊。姚安府の地



理を概述。

14日 出発、西へ。古寺山〔新譯「祥亀山・赤石山」〕西麓、羊片屯〔T・詞典①②新譯「又名宜屯街」〕、当波院（新譯）、觀音箒（新譯）、觀音堂、聚景橋、弥興を経て、孫家湾に泊。

15日 西へ。尾苴村、龍馬箒、龍馬哨、大大苴村〔②、新譯「大苴、又上莊房」〕、小大苴村〔詞典「小苴街、原名代苴」、①②「小苴」、新譯「小苴、又代苴街」〕、老虎関哨、打金莊、五里坡を経て、普昌河を渡り、普邇〔T「普棚街」〕に泊。

16日 西北へ。金鷄廟を経て、**大理府雲南県**域に入り、水盆哨、水盆鋪（②新譯）、沫滂鋪〔T①②「木滂鋪」〕を経て、大小堰塘を過ぎ、**小雲南**駅に泊。

17日 南へ。練場村、冉家屯を経て、水目山に入り、水目寺へ。水目山探訪（簡略）。僧侶無住の所に泊まる。

18日 水目寺滞在。

19日 下山。酒薬村を経て、青海子の西南をかすめ、狗村鋪を経て、清華洞（詞典①②）を觀、北へ進み、洱海衛城（祥雲）に泊。

20日 北へ。四平坡、九鼎山寺（新譯）を経て、北溪橋を過ぎ、梁王村〔①新譯「梁王山」〕、松子哨を経て、**賓川州**域に入り、北関を経て、山岡鋪（②新譯）に泊。

21日 北へ。賓居、火頭基、総府莊、紅帽村を経て、江果村〔新譯「江股」〕に泊。

22日 西北へ。煉洞を経て、鷄足山に入る。沙址村〔T「沙子街」、①②「鷄足鎮（沙址）」〕（新譯）を経て、大覺寺に至り、泊。鷄足山大覺寺に滞在、鷄足山探訪（～1月22日）。

### 3-3-2. 経由地

雲南省武定府元謀県（雲南省楚雄彝族自治州元謀県）

同 姚安府大姚県（同 大姚県）

同 姚安府姚州県（同 姚安県）

同 大理府雲南県（同 大理白族自治州祥雲県）

同 賓川州（同 賓川県）

### 3-3-3. 探訪先

大理府雲南県：水目寺、清華洞（12月17日）

大理府賓川州：鷄足山（12月22日～1月22日）

### 3-3-4. まとまった地理記述

元謀県の地理と山川（12月5日条）

賓川州の地勢（12月20日条）

## 4. 第3部 埼玉大学図書館蔵「徐霞客」関連文献目録（稿）（2）

### 4-1. はじめに

埼玉大学図書所蔵の徐霞客関連書籍の、目録と簡単な解説を施す。

各章内では、「中国語文献」「日本語文献」「その他の言語文献」の順で記す。

前稿には記載しなかった情報として、埼玉大学図書館が割り振った「所蔵ID（登録番号）」を追

加する。まず「補遺」として、前稿で取り上げた書籍の「所蔵ID」を記す。のちに、1950年代から1970年代の書籍を取り上げる。

＊補遺

- (清代) 1：徐霞客遊記 所蔵ID：213002981  
 (清代) 2：徐霞客遊記 所蔵ID：218050082  
 (清代) 3：徐霞客遊記 所蔵ID：217850030  
 (1920代) 1：徐霞客遊記大観 所蔵ID：213850306～17  
 (1920代) 2：徐霞客遊記 所蔵ID：218850051～54  
 (1920代) 3：徐霞客遊記 所蔵ID：210000204～5  
 (1920代) 4：徐霞客遊記 所蔵ID：214001558  
 (1920代) 5：新入蜀記 所蔵ID：218050130  
 (1930代) 1：徐霞客遊記 所蔵ID：700824800  
 (1930代) 2：徐霞客遊記 所蔵ID：213002956～59  
 (1930代) 3：徐霞客遊記 所蔵ID：216850377～82  
 (1930代) 4：工房小閑 所蔵ID：218050128  
 (1940代) 1：徐霞客先生世三百周年紀念刊 所蔵ID：218050330  
 (1940代) 2：地理学家徐霞客 所蔵ID：215850029・218850050（二冊所蔵）

#### 4-6. 1950年代

1950年代は、国共内戦は終了したものの、中華民国の台湾への移転、朝鮮戦争（1950～53停戦協定）、冷戦体制、大躍進運動（1958～61）とその失敗など、中国は政治的・経済的に極めて不安定で疲弊していた時代だった。文化活動・出版も停滞していたが、中華民国（台湾）と中華人民共和国（大陸）の双方で、伝統中国科学思想・科学者を顕彰する著述が編まれ、いずれにおいても徐霞客が取り上げられている。専門的な研究としては、自然地理学に詳しい任美鏐による、遊記の鍾乳洞に関する注釈がある。また、イギリスのニーダムの大著においても、徐霞客が取り上げられた。「遊記」の本文は、丁文江撰国学基本叢書本の再版・リプリントが繰り返された。

(1950代) 1

NCID	BA42980805
書名	中国科学史論集（二）
編著者	林致平等著
出版事項	臺北：中華文化出版事業委員會、1958.6
形態	1冊、平装
シリーズ等	現代國民基本知識叢書 第五輯
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	402.2: R

所蔵ID	218050215
解説	<p>中国科学史に関する論文集。(二)として「中国水利史」以下九篇の論文があり、九番目に、謝覺民「中國近代地理学開山泰斗徐霞客」(P337～356)を収録。編者の序文によれば、謝覺民は美國公教大學教授で、原文は「美國地理學人協會記錄」第48巻第1号(P73～P82)掲載で、陸鴻図により中国語に訳出されたもの。</p> <p>徐霞客とその遊記について概観し、評価を加えたものとして、ごく初期のもの。「一生簡史」「徐先生的遊歴」「徐先生的日記」「徐先生對地理學的貢獻」「徐先生發現中國西南部許多河川上源」「徐先生為山嶺地理學在中國的前驅」「徐先生的啓發中國地理以實地考察為本」からなる。「現代國民基本知識叢書第四輯」所収の張效乾「徐霞客紀年論集」((1950代)参考1)が複数者による論文集であるのに対し、一人の手による総括的な論文となっている。</p> <p>張効乾の論文集とともに、徐霞客の先駆性・科学性を、中華民國が継承することを表明したものといえよう。</p>

(1950代) 2

NCID	BA37838882
書名	中国古代科学家
編著者	中国科学院中国自然科学史研究室編
出版事項	北京：科学出版社、1959.9
形態	1冊、精装
シリーズ等	—
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	402.8: Ty
所蔵ID	213002955
解説	<p>中国古代の科学家29名を取り上げて紹介、評価した論文集。明代からは、李時珍・徐光啓らとともに徐霞客が選ばれている。熊忠英が「徐霞客」(P176～186)を執筆。政府の支持も無い中で、祖国の大部分、とりわけ西南の辺境地区を踏破し、記録を残した「偉大な地理学家」として徐霞客を評価。時代性の中で徐霞客の行動や遊記を論じている。遊記の主要な貢献として「地貌方面」と「水文方面」をあげている。前者では特に石灰岩地貌について、後者では水源の探求を特筆にあたえ、とし、「世界の科学的地質学、地理学、物理学の萌芽である」と高く評価する。科学精神の持ち主であり、中国文化の先駆性を示す存在であったという評価は、のちの中華人民共和国における徐霞客礼賛と同じものである。</p> <p>徐霞客評価を含む本書は、中華民國における「(1950代)1」に対抗したものであるといえよう。</p>

## (1950代) 3

NCID	BA49056466
書名	中國古代地理名著選讀 第一輯
編著者	侯仁之主編；顧頡剛〔ほか〕編著
出版事項	香港：中華書局股份有限公司、1963.8
形態	1冊、平装、全136頁
シリーズ等	第二輯以降は出版されず
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2: Ty: 1
所蔵ID	213850002
解説	<p>地理に関する古代の文献について、注釈を施したもの。「尚書禹貢」は全訳で、「漢書地理志」「水経注」「徐霞客遊記」はダイジェスト版に注釈。埼大蔵本は、「科学出版社版」（東京都立図書館他蔵）のリプリントだが、「科学出版社版」が1959年の出版なのでここにおいた。さらに幾分か文字を組み替えた「学苑出版社版（2005）」がある。</p> <p>「徐霞客遊記」（P122～136）は、任美鏐の選訳。前半で徐霞客の地理学上の貢献を論ずるが、カルスト地形に関して高く評価している。後半で本文を掲げながら注釈を施す。取り上げているのは、「総結性的論文」として「江源考」、「名山遊記」として「遊黄山後記」、「歴険」として「麻葉洞遊記（楚遊日記）」、「沿途観察」として「滇遊日記四」、「河流浸食」として「粵西遊日記三」、「綜述一地岩洞及其分布情況」として「桂林七星岩遊記（粵西遊日記一）」。「徐霞客旅行路線図」や黄山の鳥瞰図などを載せるが、「桂林七星岩洞」では、遠景のスケッチ画と「七星岩洞草測平面図」を載せ、徐霞客の洞穴記事が、現代の測量により明らかになった七星岩洞の状況と一致しているとして、高く評価している。</p>

## (1950代) 4

NCID	BN01279714
書名	地の科学 (The sciences of the earth)
編著者	ジョゼフ・ニーダム著、海野一隆〔ほか〕訳
出版事項	東京：思索社、1976.12
形態	1冊、精装
シリーズ等	中國の科學と文明 (Science and civilisation in China) 第6巻 (V-3、P-3)
言語	日本語 (原文英語)
ISBN	4783501068
配架場所	図書館 (シラバス)、教育国語

請求記号	402.2: cN (図書館)、402.2: cN: 6 (教育)
所蔵ID	821609000 (図書館)、908081514 (教育)
解説	<p>ケンブリッジ大学のジョゼフ・ニーダムによる中国の伝統的科学技术に関する論著の中の一冊。日本での出版は1976年だが、原著の出版が1959年なので、ここにおいた。</p> <p>本書は、原文では第3巻第3部にあたり、「第22章 地理学と地図学」「第23章 地質学〔および関連科学〕」「第24章 地震学」「第25章 鉱物学」及び「追記」からなる。</p> <p>この中の「第22章 (c) 中国人探検家に関する覚書」の中で、「科学や芸術的関心」から地理的記述をしたとして徐霞客を紹介。その記述を「17世紀の学者のものというよりは20世紀の野外研究家のそのように書かれている」と評価。また科学上の功績として、「瀾滄江と怒江が別の河であることを明らかにしたこと」や「金沙江の江源を明らかにしたこと」などをあげている<sup>(2)</sup>。</p> <p>この他、第1巻序篇「第6章 歴史概述—統一帝国」「(j) 明王朝=清(満州)王朝」(原著1954年刊)の中で、明代に地理学が盛んだったとし、「最大の旅行家」として徐霞客とその功績を簡単に紹介している。</p> <p>[参考] 湯家厚等編『海外徐霞客研究概覧』(北京科地亜盟図文設計、2011)</p>

\*参考

(1950代) 参考1

NCID	BA47313229
書名	徐霞客紀念論集
編著者	張效乾編
出版事項	臺北：中華文化出版事業委員會、1956,11
形態	1冊、平装
シリーズ等	現代國民基本知識叢書、第4輯
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	—
請求記号	—
所蔵ID	—
解説	<p>東京大学東洋文化研究所・京都大学人文科学研究所等所蔵。(1940代) 2「地理学家徐霞客」の中華民国(台湾)におけるリプリント版。張效乾の「編後記」によれば、前書刊行の翌年(1949年)に「大陸淪陷、旧籍散佚」し「此書今已絶版」となった。そこで前書に修訂を施した上で、胡適「丁在君與徐霞客」、萬稼軒「徐霞客佚文考」、丁文江「徐霞客先生年譜」を加えて刊行した、という。なお、竺可楨ら8名の著者は、氏名を記さず「國立浙江大學校史地研究所同人」と肩書きで記している。</p>



(1950代) 参考 2

NCID	BA7724662X
書名	徐霞客遊山水
編著者	沈吟霜
出版事項	香港：中華書局、1957.7
形態	1冊、平装
シリーズ等	中華通俗文庫
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	—
請求記号	—
所蔵ID	—
解説	日本では、唯一、東京都立中央図書館多摩図書館が所蔵。 徐霞客についての一般向けの概説書として、ごく初期のもの。「中華通俗文庫」は「李白」「書法家的故事」など、伝統文化10件を紹介するが、その中のひとつとして「徐霞客」が選択されている。 本文は全35頁の小冊子。挿絵も交えた、平易な概説となっている。

4-7. 1960年代

1960年代は、後半から文化大革命が始まり、大陸中国は激動の時代となる。徐霞客関連の著述も、前半期は侯仁之の伝記など刊行物が増えてくるが、香港での出版が少なくないなど、大陸中国での研究・出版はあまり進んでいない。日本では、筑摩書房の「世界ノンフィクション全集」において初めて訳出されたが、極めて短文であり、広く知られるには至らなかった。

(1960代) 1

NCID	BA40383248
書名	徐霞客
編著者	侯仁之編写
出版事項	北京：中華書局、1961.3
形態	1冊、平装、全33頁
シリーズ等	中国歴史小叢書
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	289.2: Z
所蔵ID	213850280
解説	研究者による伝記としては初めてのもののだが、一般向け。呂錫生は「通俗読物」という。

	<p>徐霞客の中国科学史上の貢献として、石灰岩地区の地貌をあげ、明代の李時珍らと並べて評価する。旅行家と地理学家として評価し、地理学上の新しい方向を開いたとするが、後継者がでなかったことも指摘している。</p> <p>『古代旅行家的故事—中国歴史小叢書合集』（中華書局、1983）に収録。同書の「第3次印刷（1997）」が埼玉大学蔵。</p>
--	---

(1960代) 2

NCID	BN09142939
書名	春天集
編著者	呉晗著
出版事項	北京：作家出版社、1961.12
形態	1冊、平装
シリーズ等	—
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	924: G
所蔵ID	924: G
解説	<p>呉晗は明清時代を中心とする歴史学者だが、新中国成立後は北京市副市長など、政治的な立場にあった。「中国歴史小叢書」の編纂にも関わっている。本書は、中国歴史に関する一般民衆・青年向けの啓蒙書で、作者にとって三番目の雑文集。「人和鬼」といった迷信と科学に関するものや、「傑出的学者玄奘」などの伝記など、39篇の文章を収録するが、その伝記のひとつに「献身于祖国地理調查研究工作的徐霞客」(P238～244)がある。もと「北京日報」(1961.5.5)掲載のもの。</p> <p>徐霞客が地理・地質学的なことがらについて、客観的な「調査」と「研究」を行い、その成果を「遊記」として記述したことを高く評価している。</p> <p>日本語訳が、「(1960代) 7」。</p>

(1960代) 3

NCID	BB17456814
書名	中国古代地理学簡史
編著者	侯仁之主編；北京大學地質地理系・中国科学院自然科学史研究室編著
出版事項	北京：科学出版社、1962.7
形態	1冊、平装、全80頁
シリーズ等	—
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語

請求記号	290.1: Ko
所蔵ID	214002483
解説	<p>中国の伝統的な地理学的事項を歴史的に著述し評価したもの<sup>(3)</sup>。唯物史観に基づき「戦国時代以前」「秦から唐」「宋元」「明清」の4時代に区分し、「第四章 明至鴉片戦争」「第四節 時代先進的地理学家」として、顧炎武らとならんで「(一) 偉大的旅行家徐霞客在自然地理学研究上所开辟新方向」(P62～67)をあげる。</p> <p>徐霞客部分の執筆は侯仁之であるが(序言)、脚注に「本段参看任美鏐“徐霞客遊記選釈”(見“中国古代地理名著選読”、科学出版社、1959年)」とあるように、「(1950代)3」の任美鏐の見解をほぼ継承。折り込みで載せる「徐霞客旅行路線図」も任美鏐のものを転載。</p> <p>短文だが、主に遊記の自然地理学的側面を紹介し、石灰岩地貌や鍾乳洞の観察調査について高く評価している。</p>

#### (1960代) 4

NCID	BB26965626
書名	中国古代地理学家及旅行家
編著者	翟忠義編著
出版事項	済南：山東人民出版社、1962.7（蔵本は第二版、1964.1）
形態	1冊、平装、本文128頁
シリーズ等	—
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2: Te
所蔵ID	218050214
解説	<p>漢代の張騫から清代の劉猷庭に至る、21人の旅行家・地理学家を紹介し、その功績を述べたもの。一般向けの読み物。</p> <p>「徐霞客」(P101～109)では、「遊記」を紹介しつつ、その自然地理的側面を高く評価する。また、「江源考」と「盤江考」を專題論文とし、「水文地理」の方面でも貢献したとする。</p>

#### (1960代) 5

NCID	BA61524144
書名	徐霞客遊記
編著者	徐宏祖著
出版事項	香港：廣智書局、出版年不詳
形態	1冊、精装、本文565頁

シリーズ等	—
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2: Z
所蔵ID	218050328
解説	<p>徐霞客遊記のテキストで、(1930代) 1の「国学基本叢書本」をリプリントしたもの。年譜などを省くが、新たにフリーハンドの徐霞客像図と徐霞客が訪ねた名勝の写真を掲載する。</p> <p>奥付に出版年を記さないが、表紙見返しに「1969年5月購入」の書き込みがあるので、それ以前の出版と見て、ここに置く。</p>

(1960代) 5の2

NCID	BA61524144
書名	徐霞客遊記
編著者	徐宏祖著
出版事項	香港：廣智書局、出版年不詳
形態	1冊、平装、本文565頁
シリーズ等	—
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2: Z
所蔵ID	209802446
解説	<p>(1960代) 6の後版。徐霞客が訪ねた名勝の写真は省く。</p> <p>「山根幸夫蔵書」の蔵書印があり、「1977,9,16 朋友書店」の書き込みがある。「H.K. \$9.00」。70年代以降の刊行かもしれないが、前版との関連でここに置く。</p>

(1960代) 5の3

NCID	BA61524144
書名	徐霞客遊記
編著者	徐宏祖著
出版事項	香港：廣智書局、出版年不詳
形態	1冊、平装、本文565頁
シリーズ等	—
言語	中国語（漢文）

ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2: Z
所蔵ID	218050327
解説	(1960代) 6の2と同じく、(1960代) 6の後版。 「鄭齊禮 購於29.5.82」の書き込みがある。「H.K. \$15.00」。80年代以降の刊行かもしれないが、前版との関連でここに置く。

(1960代) 6

NCID	BN04377039
書名	徐霞客遊記
編著者	徐宏祖；三木克己訳
出版事項	東京：筑摩書房、1960.8
形態	1冊、精装、全542頁
シリーズ等	世界ノンフィクション全集／6
言語	日本語
ISBN	—
配架場所	図書館（書庫）
請求記号	080: Se12 (3): 1-6
所蔵ID	004606810
解説	徐霞客遊記についての簡単な解説と、貴州雲南部分の抄訳。日本語訳としては初めてのもの。 本書は、河口慧海「チベット旅行記」、H. M. スタンレー「リビングストン発見記」、モハンマッド・アスアド「メッカへの道」といった旅行記を収録し、「徐霞客遊記」(P457～526)は、西南遊日記から、崇禎11年の貴州、同11年～12年の雲南の日記の一部を訳す。ごく短い部分しか訳せていないが、名山遊記ではなく西南遊日記を取り上げているところは貴重である。 解説の文章は、三木克彦『中国文学論集』（春秋社、1980）よりもはるかに簡略である。

(1960代) 7

NCID	BN08951770
書名	新中国の人間観：歴史人物を中心として
編著者	吳晗著；佐久間重男、小林文男訳
出版事項	東京：勁草書房、1965.7
形態	1冊、平装、本文257頁
シリーズ等	—
言語	日本語（原文中国語）



ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	282.2: G
所蔵ID	218050129
解説	呉晗の「春天集」[(1960代) 2] などの一部を訳出したもの。「第二部 中国の歴史人物」の五番目に「中国の地理学者・旅行家・徐霞客」(P187～203) がある。

#### \* 参考

CiNiiによれば、王軒成編著「中國古代探險家與旅行家—歴史人物傳記叢書」(宏業書局、1962.7) があり(大阪大学・東京外国語大学蔵)、徐霞客を取り上げているようだが、埼玉大学所蔵のものとして、同名の書の「香港上海書局版」(第三版、1978) があるので、この書については「(1970代)」で扱う。

#### 4-8. 1970年代

1970年代は、1966年にはじまった文化大革命が続き(～1976年)、大陸中国は大いに疲弊、出版など文化活動は低調となった。その中でも、科学者を顕彰する啓蒙書のたぐいは、社会主義中国の科学性をうたうものとして、数多く出版された。その中で徐霞客もしばしば取り上げられた<sup>(4)</sup>。

##### (1970代) 1

NCID	BA77181127
書名	中国古代探險家與旅行家
編著者	王軒成編著
出版事項	香港：上海書局、1972.12
形態	1冊、平装
シリーズ等	歴史人物傳記叢書
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	282.2: O
所蔵ID	218050213
解説	張騫以下、探險家・旅行家として著名な人物を7名取り上げて紹介し、顕彰したもの。七番目に「志潔行芳的大旅行家徐霞客」(P80～88) と題して紹介。徐霞客の行動として、当局の援助を断ったことを「志潔行芳」と評価。「遊記」の記述としては、自然科学性や探索を評価するが、他に、かつて方豪が論じた、西洋人との影響関係にも触れている。

## (1970代) 2

NCID	BA66353071
書名	徐霞客遊記
編著者	徐宏祖著
出版事項	香港：商務印書館香港分館、1975.5
形態	1冊、精装
シリーズ等	—
言語	中国語（漢文）
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	292.2: Z
所蔵ID	218050329
解説	(1930代) 3の万有文庫本のリプリント。出版国が異なるのであげた。

## (1970代) 3

NCID	BB19955145
書名	中国古代科学家 修訂本
編著者	李光羽、謝宝耿編文
出版事項	上海：上海人民美術出版社、1978.12
形態	2冊、平装、連環画
シリーズ等	—
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	402.8: R: 1～2
所蔵ID	218050212・218050220
解説	<p>手のひらサイズで、絵に三～四行ほどの文章がついている「連環画」。漫画のようなもので、文字を得意としない階層でも読めるようにしたもの。第一版は、1977.12の刊行で、本書は修訂本の初版。</p> <p>春秋時代の魯班以下、中国古代の科学家16名を紹介し顕彰したもの。下冊の最後に「徐霞客」（23頁）があり、顔梅華文、顔志強画。</p>

## (1970代) 4

NCID	BN12901186
書名	明徐霞客先生宏祖年譜
編著者	(民國) 丁文江撰
出版事項	臺北：臺灣商務印書館、1978.5

形態	1冊、平装
シリーズ等	新編中國名人年譜集成、第3輯
言語	中国語
ISBN	—
配架場所	教育国語
請求記号	282.2: Si: 3
所蔵ID	国語：S91：00184
解説	(1920代) 3収録の、丁文江による年譜のリプリント版。

#### \*参考

日本では、武田泰淳の未発表作品「霞客」が、雑誌「海」第11巻第7号（1979.7）で刊行された（参考（1940代））。

#### 注

- (1) いわゆる外邦図。今回参照したのは、「雲南」「臨安」「元江」「大理」。
- (2) なお、原著の脚注では、この二つの河が別々であることは、元代の朱思本が既に指摘していたとする。
- (3) 本書に先行する中国の地理学史として、王庸著「中國地理學史—中國文化史叢書第2輯」（商務印書館、1938.4）があるが、そこでは徐霞客は取り上げられていない。
- (4) 本稿で取り上げたもの以外でも、「中国古代科学家史話」（遼寧人民出版社、1975）（東京都立図書館他蔵）の、熊樹梅「明代著名地理学家徐霞客」（P200～209）などがある。

(2019年3月29日提出)

(2019年4月19日受理)